『万安方』の小児門について

安達原　曄　子

日本医史学雑誌第二十九巻四号
昭和五十八年　十月　三十日発行
昭和五十八年六月一日受付

はじめに

『医心方』[1]は現存する日本の医書の最古のものといわれているが、その後長い期間、日本で主要な医書は著されなかった。一三一五年に至って、梶原性全[2][3]によって『万安方』[4]が著された。これは『医心方』より三百年余り後のことである。今回は『万安方』の小児門について、とくに歴史的経緯のなかで、『医心方』との相違などを中心に検討したい。

(一)　構成について

『万安方』は全六二巻から成り、小児門は巻第三九から巻第四九まで一一巻に及ぶ。そこに挙げられた治療法は全部で一一八三であり、『医心方』の四九五の倍以上である。しかし、『医心方』では項目の順序に規則性を持たせ、項目毎に番号を打ち、出典を明記しており、全体にその構成には努力のあとがみられ、単なる書き写しではないのに比べ、『万安方』小児門ではほとんど中国の小児科専門書である『幼幼新書』からの抜萃であり、処方の出典も含めてそのまま書き写したものである。したがって構成も『幼幼新書』と似ている。『幼幼新書』には出典の記載があるので、『万安方』小児門にも出典は記載されているが、小児門以外では、『万安方』には出典の記載がないものが多い。それは『万安方』が参考とした中国の文献に出典の記載がないものが多いからである。『幼幼新書』は一一五〇年に劉昉によって著された全四〇巻の

大著であり、『万安方』には全部が写されているわけではない。実際に必要と考えられる初生養護法をはじめ、各疾患に対する病源論や治療法を中心に抜萃しており、方書叙例[5]、求端探本、病源形色、胎教といった部分は省かれている。この点に関しては『医心方』、『千金方[6]』、『外台秘要方[7]』と似ている。このように、構成に関しては『医心方』ほどの積極性はないが、その抜萃の仕方は実践的である。また、『医心方』とちがって欄外の注や「私云う……」の形での私見も多いし、欄外の注では難解な漢字の意味をわかりやすく説明している。

『万安方』小児門の後記には、『幼幼新書』の五三一門のうち、二〇～三〇分の一か二の門しか載せていないと記されているが、それでも医心方に比して膨大な量である。

(二) 出典について

『幼幼新書』には出典が記載されているので、『万安方』小児門にもそれが載っている。しかしそれらの原本を著者が実際に読んでいたかは、欄外の記載や「私云う……」といった部分から推測するほかない。それによれば、『和剤局方』、『聖済総録』、『千金方』、『衛生良剤方』、『三因方』、『医説』、『養生必用法』、『可用法』、『事證方』、『厳氏済生方』、『心用法』、『蒔元明秘扶』、『直指方』は実際に読んでいたと考えられる。表1は記載されているすべての文献を挙げたものである。

巻第四〇の二までの初生養護を中心とする部分には『千金方』や『外台秘要方』などの古い文献からの引用が多い。

(三) 私見について

『医心方』では、撰者の意見は「今案ずるに……」といった形で述べられてはいるが、薬物の使用にあたっての細かい記載がなされているにすぎない。これに対して『万安方』では「私云う……」の形で著者の私見が述べられている。それ

表 1 『万安方』小児門に引用されている文献

1 聖恵方（宋）
2 千金方（唐）
3 張渙(小児方)（宋）
4 嬰孺方（唐以前）
5 吉氏家伝（宋）
6 外台秘要方（唐）
7 大医局方（宋）
8 荘氏家伝（宋）
9 銭乙（宋）
10 千金翼方（唐）
11 王氏手集
12 劉氏家伝（宋）
13 活人書（宋）
14 張氏家伝（宋）
15 子母秘録（唐）
16 顱顖経（宋以前）
17 葛氏肘後（晋）
18 茅先生方（宋）
19 漢東王氏小児方（宋以前）
20 丁時発伝（宋）
21 孔氏家伝（宋）
嬰童宝鑑
石壁経（宋）
朱氏家伝（宋）
広利方
古今録験（唐）
安師所伝方（宋）
元和紀用経（唐）
嬰童実鑑
保生信効
鄒愈伝（宋）
博済方
九籥衛生（宋）
趙氏家伝（宋）
呉氏家伝（宋）
養生必用
万全方
集験方
仙人水鑑
薬性論
究原方（宋）
鳳髓経
簡易方
張鋭雞峯方
龍木論
医説（宋）
痘疹論
譚氏小児方
聚宝方（宋）
全生指迷方
全嬰集
姚和衆
侍郎崔方
恵眼鑑證
宝童方
食養方
洪州張通人伝
粛景仁献海上方
西京下左蔵
衛生良剤方
円経
孟詵
簡要済衆方
三因方（宋）
兵部手集（唐）
相泻伝
百一選方
大観本草
聖済総録
日華子本草
他

は処方内容にも及んでいる。たとえば発黄に茵蔯五苓散を用いる項では、桂を減ずるか除くかするとよいと述べたりしている。また、灸のつぼを考案したり、呪術と灸を合わせた治方、一つの生薬による外用薬もつくっている。

『医心方』には治法の考案はみられない。このようなことから、治療に対する積極性と経験の豊富さが伺われる。また、日本で入手できない薬物が含まれる処方を省略すると述べたり、その生薬の代りになる国産の薬物を挙げたりしている。薬物に対する知識も増していることが伺える。たとえば、葛根は野生のものより人家に生えたもののほうがよい、と述べたり、甘皮について、『嬰孺方』では甘草を用いていると言ったり、また、朴消についての欄外の記載で、『直指方』では滑石を用いている、と述べたり、積には蓬莪朮や京三稜を加えるとよい、と述べたりしている。

また、処方については、とくによく効くといった記載があったり、人参湯の乾姜を除いて厚朴を加えたのが調気湯であると述べたり、小柴胡湯はすべての丹毒に用いるべきであるといったり、四物湯を服して羊蹄膏をつければどのような瘡

表2 『万安方』小児門の治方の内わけ

内　服		756 処方
外　用(洗も含む)		271 処方
浴　用		16 処方
その他	含嗽	78 処方
	坐剤	
	貼	
	点眼	
	洗眼	
	耳につめる	
	耳に点ずる	
	耳のそばに置く	
	舌や口中につける	
	喉中に吹き入れる	
灸		45
呪　術		13
灸＋呪術		2
歯をたたく		1
瘡をあぶる		1
	計	1183

でもなおる、とあったりする。また、痼と癇とは類したものであると私見を述べていたり、赤斑疹と発斑とは異なり、発斑は傷であるが赤斑疹はそうでないと述べたりしてよく内容を理解している感がある。また、丁奚といって腹が大きくなって黄瘦する病のところで、医者は病源もわからずに死なせてしまうから、これを明らかにする必要があると述べている。

さらに、脱肛に対しては、排便時も含めて常に臥位にさせておくと一〇日あまりで治癒すると述べている。(8)

(四) 治療法の内容について

表2は『万安方』小児門の中の処方の内わけをみたものであるが、内服は七五六処方、外用は二七一処方、浴用一六処方、その他含嗽、坐薬、貼薬、点眼、洗眼、耳につめる、耳に点ずる、などといった処方が七八処方ある。その他に灸が四五、呪術一三、灸と呪術の併用が二、歯をたたく、瘡をあぶる、といった様々な治方をとり入れている。『医心方』小児門においてはこれほど多様ではない。

また、表3は構成生薬の数によって処方を分けた表であるが、『万安方』小児門中の全一一二処方中、単剤による処方は三六二処方で三二パーセントであり、『医心方』の七二パーセント(9)、『千金方』の四三パーセント、『外台秘要方』の四一パーセントと比べるとはるかに少ない。内服は七五六処方であり、全処方の六七パーセントに相当する。『医心方』

では内服よりも外用のほうが多く、[9]『千金方』でも内服は全処方の五二パーセントであり、『外台秘要方』でも五五パーセントで、『万安方』では内服が増えていることがわかる。

表3でわかるように、構成生薬の数が一〇以上の処方はほんの一〇処方にすぎない。また、外用では単方が圧倒的に多く、しかも煎用は少ないことがわかる。内服では煎用が三〇四処方であり、丸または散剤が四五二処方であるが、丸剤または散剤に単方のものが多い。また、煎用の処方で最も多いのは六つの生薬で構成された処方である。

(五) 『万安方』小児門に引用された文献における処方内容の比較

表4、表5、表6は『万安方』小児門に引用されている文献を、引用処方数の多いものから順に挙げたものである。これらのうち、唐以前に著されたものは『千金方』、『嬰孺方』、『外台秘要方』、『千金翼方』[10]、『子母秘録』、『葛氏肘後』などで、単剤の外用が多いのが特徴である。『千金方』小児門の処方三一四のうち、単方は一三五処方で四三パーセントであるのに対し、『万安方』に引用されている『千金方』からの単方の割合は一四〇処方中の八〇処方、五七パーセント、と多い。同様に『外台秘要方』の小児門における単方の割合は三五一処方中の一四四処方、四一パーセントであるのに比し、『万安方』小児門に引用されている『外台秘要方』の単方の率は二三処方中の一七処方で七四パーセントである。『幼幼新書』と『万安方』の比較はまだ行っていないので、このように古い医書からとくに簡単な処方を抜萃している傾向が『幼幼新書』においてすでにみられるものなのかどうかはわからないが、二剤以上の処方は宋の時代に著された医書から抜萃された傾向にある。

また、服用法を比較すると、『聖恵方』[11]、『嬰孺方』、『活人書』[12]以外の中国の引用文献では煎用よりもそれ以外の服用法のほうが多い。表4の『聖恵方』にみられるように、煎用が八八処方でそれ以外の用法は七〇処方である。『嬰孺方』では煎用が一七処方、その他は一五処方、『活人書』では煎用が一八処方で他は二処方である。唐や宋の時代には煎用よりも

表 3　構成生薬の数（『万安方』小児門）

	用法＼構成生薬の数		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	10以上	計
万安方	内服	煎用	24	23	34	47	40	55	40	19	10	8	4	304
		丸または散など	103	64	64	49	45	58	32	21	4	6	6	452
	外用(洗も含む)	煎用	2	2	3		1	2		1				11
		その他	191	44	17	3	3		1	1				260
	浴用	煎用	5	2	1	1	1							10
		その他	4	2										6
	その他		33	30	6	4	3	1	1					78
	計		362	167	125	104	93	116	74	42	14	14	10	1121

表 4　『万安方』小児門中の出典別の処方の構成生薬の数（一）

	1 聖恵方（宋）					2 千金方（唐）					3 張渙（宋）				4 嬰孺方（唐以前）			5 吉氏家伝（宋）			6 外台秘要方（唐）				
用法＼生薬構成数	内服		外用	灸	咒	内服		外用	浴	灸	内服		外用	浴	内服		外用	内服		外用	内服		外用	灸	咒
	煎	散など				煎	散など				煎	散など			煎	散など		煎	散など		煎	散など			
1	5	15	60	9	1	6	19	53	2	19		1	2				16		6	1		6	11	1	2
2	10	12	23			1	1	11	1		1	1	3	2	1	2	3	2	2	2			1		
3	10	9	6			3		4				3	2		2	2	4	1	7		1		1		
4	4	4	1			5	1	1	4		1	6			4	3		4	5		2		1		
5	11	6	2				1				8	7			5	2		1	3		3				
6	21	7	1			2					14	11	1		1	2			4				2		
7	12	6				1	1				4	6			3	3		1	2				1		
8	5	4	1				1	1			3	2				1		1					1		
9	6	2				1					2														
10以上	4	5				1						1			1										
計	88	70	94	9	1	20	24	70	7	19	33	38	8	2	17	15	23	10	29	3	6	6	18	1	2
	262					140					81				55			42			23				

表 5 『万安方』小児門中の出典別の処方の構成生薬の数（二）

生薬構成＼用法	7 大医局方（宋）			8 荘氏家伝（宋）				9 銭乙（宋）				10 千金翼方（唐）				11 王氏手集					12 劉氏家伝（宋）			
	内服		外	内服		外	灸	内服		外	呪	内服		外	灸	呪	内服		外	灸	呪	内服		外	呪
	煎	散など	用	煎	散など	用		煎	散など	用		煎	散など	用			煎	散など	用			煎	散など	用	
1				1	2	4	4			1	1		1	13	3	1			1	1	1	1	3	1	3
2	1					1			2				1	2				5					2	2	
3	1			1	5	1		2	4				1	1			2	4				1	1	1	
4	2	1		1	1			2	4					1			1	4				1		1	
5		5			1	2			3								1	2				1	1		
6	1	3		2	1			1	3					1				3					1		
7	5	6		1	1			1																	
8	2	1		1				2														1	1		
9																							1		
10以上	3		1																						
計	15	16	1	7	11	8	4	8	16	1	1		3	18	3	1	4	18	1	1	1	5	10	5	3
	32			30				26				25					25					23			

表 6 『万安方』小児門中の出典別の処方の構成生薬の数（三）

生薬構成＼用法	13 活人書（宋）		14 張氏家伝（宋）		15 子母秘録（唐）			16 麟頭経（宋以前）			17 葛氏肘後（晋）			18 茅先生方（宋）			19 漢東王先生（宋以前）				20 丁時発伝（宋）		21 孔氏家伝（宋）		
	内服		内服		内服		外	内服		外	内服		外	内服		外	内服		外	灸	内服		外	内服		外
	煎	散など	煎	散など	煎	散など	用	煎	散など	用	煎	散など	用	煎	散など	用	煎	散など	用		煎	散など	用	煎	散など	用
1		1		1	1	4	11		1	5	1	6	3					3	1	1			1	2	2	
2	3			1			1			1			1		1			1	1							1
3	5			1					3			1			3			1	1			1	1		1	
4	3		1	2					2		2	1			1	1		1				1		1		
5	3	1	2	1							1			1	3	1	1	1				1				
6	3		2						1						2						2	2			1	
7			1	1				1						1			1				1			1		
8			1	2					2													1		1	1	
9									1																	
10以上	1		2																							
計	18	2	9	9	1	4	12	1	10	6	4	8	4	2	10	2	2	7	3	1	3	6	2	5	5	1
	20		18		17			17			16			14			13				11			11		

丸剤や散剤のほうが多く、日本でもそうする傾向にあったといえる。

このように『万安方』にはその時代の特徴的傾向が数多く認められる。煎用よりもそれ以外の用法のほうが多く、古い医書からは単剤の処方が多く用いられ、多数の処方が現れてくる中で、古い処方は一部の頻用される処方を除いて用いられなくなる、といった傾向である。

(六) 初生養護法について

いわゆる初生養護法と思われる項目は、『万安方』巻第三九のはじめから巻第四〇の二までと思われる。その項目は、小児、断臍法、裹臍法、拭初生児口法、甘草と朱蜜を与える法、朱蜜法、張渙牛黄法、蔵衣法、小児剃髪法、浴児法、小児名法、相小児寿命、小児脈法、択乳母、乳小児法、乳母忌慎法、哺児法、小児初生将護法、乳母乳汁無きを治す法、小児変蒸[13]といったもので、その項目だけみても『医心方』や『千金方』、『外台秘要方』のはじめの部分ときわめてよく似ている。これらの項目のうちで『医心方』に無いものは、蔵衣法、小児剃髪法、相小児寿命、小児脈法、乳母乳汁無きを治す法、である。『医心方』にあって『万安方』にないものは、小児新生祝術、小児初着衣方である。

このように『万安方』小児門の初生養護の項は『医心方』、『千金方』、『外台秘要方』と重なる部分が多く、その内容もほとんど同じ部分が随所にみられる。これらは『崔氏』、『諸病源論』、『産経』、『小品方』、『葛氏』といった、より古い文献からの引用である。初生養護の部分にはその他にも『千金翼方』からの引用がかなりみられる。

断臍法に関しては、これらの文献の他に『嬰童宝鑑』や『秘要指迷方論』、『荘氏家伝』、『張渙』などからの引用でさらに詳しく述べ、臍につける散薬の処方や灸法を載せているが、臍断部を焼烙するという簡便な臍破傷風の予防法については書かれていない。それは一二二四年頃に著された『小児衛生総微論方』にはじめて記載がみられるが、『万安方』には引用されていない。ただ、風臍として臍から破傷風がおこることは述べている。

蔵衣法についてと剃髪法は『外台』の引く、『崔民』から主に引用している。小児脈法は『顱顖経』をはじめ、『嬰童宝鑑』、『保生論』などから引用している。

以上のように初生養護法に関しては、『外台秘要方』や『千金方』、さらに古い『産経』や『小品方』といった医書に源を発する記載が多い。中国における医学の歴史がやはり古いものの上に築かれていることを感じるとともに、初生養護に関してはほとんど『医心方』の時代と変るところなく受け入れられてきている。蔵衣[14]に関しては呪術的記載も多い。また、剃髪によい日、浴すによい日、小児名法、相小児寿命法といった記載も多い。

『医心方』や中国の古い医書にみられる変蒸という概念は『万安方』にも同じようなものとして受け継がれている。それらの古い医書にみられる概念のほか、銭乙の変蒸論として五行説を持ち込み、変蒸のたびに臓腑が生じるとしている。これは新しい時代の変蒸に対する概念の変化をとり入れたこととして興味深い。また、変蒸に対する処方も、黒散、紫円、紫霜円などを用いているところは『千金方』や『外台秘要方』と同様であるが、そのほか『聖恵方』から柴胡散、『張渙』から清心湯などを挙げている。

(七) 病因について

『医心方』においてもそうであったが、『万安方』でも病因についてはよく記載が挙げられている。『医心方』の場合と同じく『諸病源候論』[15]からの引用がある。『医心方』では他からの引用はなかったのに比べ、『万安方』では『万金方』、『恵眼観証論』、『聖恵方』、『嬰童宝鑑』、『活人書』、『全嬰集』などといったさまざまな医書から引用している。

『諸病源候論』について、『医心方』と『万安方』とでその引用の仕方を比較してみると、両者に引用されている項目は少ない。『医心方』には七六項目の引用があるのに対し、『万安方』には八八項目が引用されている。そのうち両書で重複する項目は三九項目である。これらのうち、『医心方』のほうが『万安方』よりも文を長く引用している項目は三つにす

ぎない。『万安方』のほうが長く引用している項目は一二である。『医心方』では陰陽五行による説明は採用していないのに比べ、『万安方』ではとり入れている部分があるためと思われる。

(六) 治療法について

『医心方』では薬物が入手困難だったためかあまり効果があるとは思われないような単一の物質による治療が多かったが、[9]『万安方』においては現在も一般に漢方方剤で用いられている生薬で構成された処方が多い。その使用も的確である。驚癎には麝香の入った処方、疳瘦には人参、白朮、黄耆などの補薬が入った処方が多く、慢性下痢には黄連がよく用いられる傾向があったり、蛔虫には苦楝皮、鴨虱、蜜陀僧、檳榔子などを用いている。また、疳といって臓腑の不調和によっておこる虚弱体質には大黄、附子、人参といった瀉剤と補剤の両者が混じた処方を多く記している。下痢に対しては白朮、人参、茯苓、甘草などをベースにした処方が多く、黄連、肉豆蔻もよく用いられているが、大黄の入った処方も多い。血性下痢には梔子、艾葉、黄芩、黄連などを用いた処方が多い。小便の出血には黄芩、阿膠、車前子の入った処方が多い。咳には貝母、乾姜、麻黄などが多く用いられ、黄疸に赤小豆や茵蔯や梔子を用いている。また、擲撲損瘀に対しては蒲黄を用いた処方が多い。

『医心方』では傷寒に関する処方は小児門では一つのみだが、『万安方』小児門では傷寒の記載はずっと詳しい。『傷寒論』に出ている処方も、傷寒、発黄、瘧疾の項に処方内容も記載して出ているものが七処方、内容の記載はなく、処方名だけのものも、小柴胡湯、大柴胡湯など、いくつかみられる。これらは『傷寒論』から直接の引用ではなく、『活人書』を通じてのものではあるが、『傷寒論』の処方を特別扱いしているのではなく、他の医書からの様々の処方の中にまぎれている感があり、処方の選択はかなり多くのものから柔軟性を持って行われている。このことは『幼幼新書』に負っているわけではあるが、『万安方』の著者もかなり処方を使いこなしていたことが伺われるので、『幼幼新書』からどのような

抜萃の仕方を行っていたのか興味がある。

以上のように、『医心方』の時代よりも『万安方』の時代のほうが中国の本草学や方剤学が著しく進行したことがうかがえる。それが『万安方』に反映していると考えられ、治療学の幅の広さ、深さをみることができる。服用法についての記載も詳しい。たとえば銀白散はいろいろな症状に対して用いられるようであるが、症状によって麝香飯飲、陳米飲、丁香湯、濃米飲、薄荷葱白湯、金銀薄荷湯、紫蘇木瓜湯、姜香湯、生姜棗湯などで飲み分けよ、とある。また、泄瀉の項では二色円（巴豆、杏人）を、泄瀉には新汲水で、赤痢には甘草湯で、白痢には乾姜湯で服せ、とある。薬は一般に、とくに丸剤や散剤は粥飲や姜湯粟米飲などで服すように書かれていることが多い。

このようにあらゆる面で細かく記載されているのが特徴ではあるが、日常とくによく用いられた処方を私見などから伺い知ることができる。熱性下痢に対しては五苓散、銭氏白朮散、平胃散がよい、とあり、愛用していたことが感じられる。無熱性の下痢には附子を加えた処方がよいとも記している。

また、もう一つの特徴として、治療上不必要と思われるほどに病気を細かく分類している。疳を五疳、二四疳に分けて述べたり、積を細かく分けたりしているが、陰陽五行説の影響が強く感じられる。傷寒さえも（陰陽）五行説による潤色が多く認められる。

(九) 呪術について

治療法一一八三のうち、呪術的なものは一三にすぎない。灸と呪術の組み合わせも二つである。一般に『医心方』よりも呪術的記載は少ない。治療法に関する呪術的記載は、眼の瘡疹を防ぐには、朝人の起きないうちに井戸に豆を七粒、病児に投げ込ませるとよいとか、服薬するときに東に向えとか、春に丸薬をのんではいけないとか、瘧のときに食べてはいけないものは乳母も食してはいけない、といったことである。また、魚の骨がささったときには食べた魚の骨を頭に置く

とよい、とある。

無草病[9]は『医心方』では鳥のせいにされているが、『万安方』では『漢東王先生家宝』から引用して、鳥ではなくて邪のいたすところであるし、児の衣を露してはいけないのも、鳥のためではなく、陰気によって児が病にならないようにするためだという考えも記している。合理的な態度と思われる。

まとめ

『医心方』においては、当時『医心方』が参考にしたと考えられる『千金方』よりもずっと詳しく小児篇が著されているのに比べ、『万安方』では『万安方』小児篇の参考書である『幼幼新書』よりもずっと簡略である。それでも、『万安方』の時代は中国医学の膨大化がみられたので、それを反映して『医心方』よりもずっと膨大な著作となっている。『万安方』小児篇は『幼幼新書』の抜萃にすぎないにもかかわらず、私見や欄外の注から察するに、著者は多くの医書を読んでおり、実際にかなりの処方を使用し、生薬の知識も深いことが察せられる。むしろ一つの本だけを参考としたことで、中国の膨大な量になる処方を略そうとしたとも考えられよう。『医心方』よりも進歩している点は、痼や傷寒や下痢といった、小児に最も多くみられる疾病に対し、多くの治療法が挙げられ、その処方内容も生薬の種類や構成などに格段の進歩が伺われることである。当時の中国における医学の進歩に日本の医学もよくついていっていると感じられる。『万安方』小児門に『幼幼新書』からどのように抜萃されているかをみるのが今後の課題である。

『医心方』は構成の仕方が実際に即している点が優れているが、撰者の意見の表示はわずかである。『万安方』では欄外の注をつけ、私見として自ら作った処方を記したりするまでに著者の意思が反映されている。この自己主張は、『医心方』の世界においてすでに認められる合理的、実践主義的精神とあいまって、将来、経験が積み重なるにつれて日本独自の医学をつくりあげる力となるものであろう。

文　献

(1) 『医心方』　丹波康頼によって撰せられた医書。その参照は安政版とした。
(2) 梶原性全　石原明「梶原性全の生涯とその著書」日本医史学雑誌　一六（二）九―二〇、昭和三一年。
(3) 梶原性全　石原明「梶原性全の生涯とその著書」日本医史学雑誌　一六（四）七―八、昭和三一年。
(4) 『万安方』　内閣文庫所蔵本を用いた。
(5) 求端探本、方書叙例、病源形色　『幼幼新書』の第一巻から第三巻までの題目。第一巻の求端探本には児のつくり方、男女の生み分け方などが処方も含めて書かれている。第二巻の方書叙例には小児についての一般概念や寿命のみかた、三関の脈のとり方などが記されている。第三巻の病源形式には人相や顔色などによる病状や予後の見分け方などが記されている。
(6) 『千金方』　唐の西暦六五〇年頃に孫思邈が著した医学書。米沢本の安政復刻版を用いた。
(7) 『外台秘要方』　西暦七五二年に王燾によって著された医書。静嘉堂文庫所蔵のものを参照した。
(8) 脱肛に対しては……　『万安方』第四六巻の二六の脱肛の項に述べられている。
(9) 『医心方』の七二パーセント、『千金方』の……　安達原曄子「日本における初期の小児科領域についての一考察」日本医史学雑誌　二九（三）二九一～三〇三　昭和五十八年。
(10) 『千金翼方』　孫思邈が『千金方』を著した後に、西暦六八〇年頃、『千金方』を補う目的で書かれた医書。
(11) 『聖恵方』　九八二―九九二年に著された『太平聖恵方』のこと。
(12) 『活人書』　一一一一年に朱肱によって著された、『傷寒論』を底本とした医書。
(13) 変蒸　『諸病源候論』に、変蒸とはそれによって血気を長ずるもので、変は上気、蒸は体熱で、軽いときと重くなるときとがある。軽い場合は体がわずかに熱して驚したりする。重い場合は体が壮熱して脈が乱れたりする、とある。小児の発育過程で、一定の日数がたつとおこるといった独特の古い概念。
(14) 蔵衣法　胎盤をおさめる法。
(15) 『諸病源候論』　隋の時代の西暦六一〇年に巣元方が著した病因についてのみ記した医書。宮内庁書陵部所蔵のものを参照した。

稿を終えるにあたり、御指導いただきました北里研究所附属東洋医学研究所の大塚恭男先生はじめ諸先生に感謝の意を表します。

なお、本論文の要旨は第八三回日本医史学会総会において発表した。

（国立東京第二病院）

A Study on the Pediatric Chapter in the "Man-anpo"

by

Akiko ADACHIHARA

The "Man-anpo" is a representative medical book of the Kamakura period in Japan. It was written in 1315 by Shozen Kaziwara and it seems to be the major medical book which appeared next to the "Ishinpo". The "Man-anpo" is made of 62 volumes and its pediatric part occupies 11 volumes (vol. 39-49). The number of prescriptions in the pediatric part of the "Man-anpo" is 1183 and it is more than twice as much as that in the "Ishinpo". But the prescriptions of the pediatric part in the "Man-anpo" were all picked up from a Chinese pediatric text book named "You you xin shū" which was written by Liu fang in 1150 and composed of 40 volumes. As there is nothing new about the composition of the pediatric part in the "Man-anpo" which is seen in the "Ishinpo", the contents of the pediatric part of the "Man-anpo" tell us that the medical level in that period was much higher than that in the period of the "Ishinpo".

It can be said because of the following facts: 1) The number of prescriptions of internal medicine in the pediatric part of the "Man-anpo" is 756 which is larger than that of medicine for external use, whereas the number for internal medicine is much smaller than the number for external medicine in the "Ishinpo". 2) Only 32 percent of the prescriptions in the pediatric part of the "Man-anpo" are

composed of one medical herb in comparison with 73 percent in the "Ishinpo". 3) The author of the "Man-anpo" seems to have had quite a high level of skill to use the prescriptions composed by medical herbs which we can guess from the explanatory notes.